第４章　遺　物

本章では、東山田遺跡第２次調査で出土した遺物のうち、掘立柱建物出土の遺物を、出土した遺構ごとに報告する。大半は建物を構成する柱穴からの出土だが、遺構の検出時や溝などといった付属すると判断した遺構からの出土遺物がある。掲載した遺物は、第100図１～第102図65に示した65点である。掲載数の多い順に種別をあげると、須恵器が31点、土師器が29点、縄文土器が３点、石器が１点、かわらけが１点となる。この数値は実測した個体の掲載数であるため、各種別の実際の出土比率をそのまま示すものではないが、須恵器の出土率が高いのが特徴的である。土器のほとんどは破片であり、同一個体を別図として示していることがあり得る。なお、前章で報告した柱列については、実測すべきと判断した出土遺物はなかった。

８号掘立柱建物　１の土師器坏を図示した。Ｐ１からの出土である。ロクロを使用しており、底部には回転糸切痕が残る。内面のヘラミガキは非常に明瞭である。

12号掘立柱建物　２の土師器坏を図示した。Ｐ５からの出土である。ロクロを使用しており、底部の中心付近にのみ回転糸切痕が残る。

18号掘立柱建物　３の土師器坏を図示した。Ｐ２からの出土である。ロクロを使用している。底部の全面にケズリおよびナデの調整が施されている。

22号掘立柱建物　４の土師器坏を図示した。Ｐ２からの出土である。ロクロを使用している。内外面ともに調整は不明瞭である。

24号掘立柱建物　５の須恵器坏を図示した。Ｐ２からの出土である。外面の器面が特に荒れており、調整は不明瞭だが、底部に微かに糸切痕が認められる。

25号掘立柱建物　６の須恵器坏を図示した。遺構検出時の出土である。再酸化のため器面が荒れ、調整等は不明瞭であるが、底部は回転ヘラ切りのようである。

27号掘立柱建物　７の須恵器蓋を図示した。Ｐ14からの出土である。

35号掘立柱建物　８の土師器甕を図示した。建物建設前に施された造成部ℓ１からの出土である。ロクロは使用していない。

42号掘立柱建物　９の須恵器鉢を図示した。Ｐ４からの出土である。復元口径が30㎝を超える大形品

である。胎土は精製されておらず、白色砂粒を顕著に含む。

44号掘立柱建物　10の須恵器壺を図示した。Ｐ８からの出土である。外面に淡緑色の自然釉が認められる。胎土や色調に認められる特徴から、大戸窯産の長頸壺と思われる。

45号掘立柱建物　11の土師器坏を図示した。Ｐ１からの出土である。ロクロを使用している。内面の調整は不明瞭である。

47号掘立柱建物　12の土師器坏を図示した。Ｐ７からの出土である。ロクロを使用している。内外面ともに調整は不明瞭である。

48号掘立柱建物　13の須恵器壺と14の須恵器甑を図示した。いずれもＰ７からの出土である。13の外面は自然釉が顕著である。胎土や色調に認められる特徴から、大戸窯産の長頸壺と思われる。14は胎土が精製されておらず、白色砂粒を顕著に含む。外面に叩き目が認められる。

49号掘立柱建物　15のかわらけを図示した。Ｐ４柱痕の検出面からの出土である。底部外面の回転糸切痕はナデ消されているようだが微かに認められる。

57号掘立柱建物　16の土師器坏、17・18・19の須恵器坏を図示した。16・19はＰ２、18はＰ１、17は付属溝１からの出土である。16はロクロを使用している。17は、口縁部と底部の破片があり、接合はしなかったが胎土や色調の類似から同一個体と判断した。18・19は底部に回転糸切痕が残る。19は胎土が精製されておらず、白色砂粒を顕著に含む。

58号掘立柱建物　20・21の須恵器坏、22の須恵器円面硯を図示した。20はＰ４、21はＰ１、22はＰ８からの出土である。21は底部に回転糸切痕が残る。22は外面に交差する斜沈線よる模様が描かれる。胎土や色調に認められる特徴から、大戸窯産の円面硯と思われる。

59号掘立柱建物　23の土師器坏を図示した。Ｐ10からの出土である。ロクロを使用している。内面の調整は不明瞭である。

62号掘立柱建物　24・25の土師器坏、26・27の土師器甕、28・29の須恵器坏を図示した。24はＰ13、25はＰ５、26はＰ12、27はＰ10、28はＰ５、29はＰ９からの出土である。24・25はロクロを使用している。いずれも調整は不明瞭である。26・27はロクロを使用していない。27は胴部下半に顕著な粘土の固着・酸化が認められ、竈に据え付けた痕跡と思われる。29は器面の荒れが著しい。

63号掘立柱建物　30の土師器坏、31の須恵器蓋、32の須恵器坏、33の須恵器円面硯を図示した。30はＰ５、

31はＰ９、33はＰ３からの出土で、32はＰ６とＰ９から出土した破片が接合した。30はロクロを使用している。32は底部に回転糸切痕が残る。底部外周には平行する筋が認められ、板目の圧痕と思われる。33は外面に斜沈線が一条のみ確認できるが、22と同様の模様であろう。胎土や色調に認められる特徴から、大戸窯産の円面硯と思われる。

64号掘立柱建物　34・35の土師器坏、36の須恵器高台付坏、37の須恵器壺を図示した。34・36はＰ10、35はＰ６、37はＰ５からの出土である。34はロクロを使用しておらず、丸底である。体部に段やくびれなどは形成されない。35はロクロを使用している。36は胎土が精製されておらず、白色砂粒を顕著に含み、内外面とも褐色を呈する。底部には微かに回転糸切痕が認められる。

65号掘立柱建物　38の土師器坏、39の石鏃を図示した。38はＰ３、39はＰ５からの出土である。38はロクロを使用している。39は茎がわずかに突出する形状である。石質は判然としないがガラス質で、重量は0.9gである。

66号掘立柱建物　40の須恵器を図示した。Ｐ４からの出土である。口縁部もしくは高台とみられるが、小片のため器形は明確でない。端部か平坦になることから、高台と判断した。ただし、端部の反対側で強く屈曲しており、この部分が頸部とすれば口縁部となる。

69号掘立柱建物　41の土師器坏を図示した。Ｐ３からの出土である。ロクロを使用している。小片のため、径の復元はできなかった。内外面に漆とみられる付着物が認められる。外面は付着物が垂れるように付着しており、坏をパレットのようにして使用したことが想定できる。

71号掘立柱建物　42の須恵器鉢を図示した。Ｐ１からの出土である。復元口径が約36㎝になる大形品である。胎土は精製されておらず、白色砂粒を顕著に含む。

72号掘立柱建物　43・44の土師器坏、45の須恵器蓋、46の須恵器円面硯を図示した。43・45・46はＰ５、44はＰ７からの出土である。43・44はロクロを使用している。43は内外面が黒色処理されている。46は体部に縦長の方形になるとみられる孔があき、その孔と連動するように細い沈線を縦横に配置して模様を描く。胎土には白色砂粒が顕著に混入する。

73号掘立柱建物　47の須恵器を図示した。Ｐ４からの出土である。底部のみの破片であり、器形は判然としない。底部には回転糸切痕が残る。内面は平滑にならず、ロクロ目が顕著に認められる。

74号掘立柱建物　48の土師器甕と49のミニチュア土器を図示した。48はＰ３と358号土坑出土の破片が接合し、49はＰ５からの出土である。48はロクロを使用している。49は胎土に繊維の顕著な混入がみられる。色調は表面が褐色であるのに対して中は灰色を呈し、断面がサンドイッチ状となる。

76号掘立柱建物　50の土師器坏を図示した。Ｐ２からの出土である。ロクロを使用している。底部に回転糸切痕が残り、底部外周は回転ヘラケズリされる。

79号掘立柱建物　51の土師器坏、52・53の須恵器坏を図示した。51はＰ10、52はＰ９からの出土で、53はＰ１と80号掘立柱建物のＰ１出土の破片が接合した。前章で報告したように、79・80号掘立柱建物は同一場所での建て替えもしくは重複である。51はロクロを使用している。52・53は底部に回転糸切痕が残る。53は底部外周が回転ヘラケズリされ、板目の圧痕と思われる平行する筋が部分的に認められる。

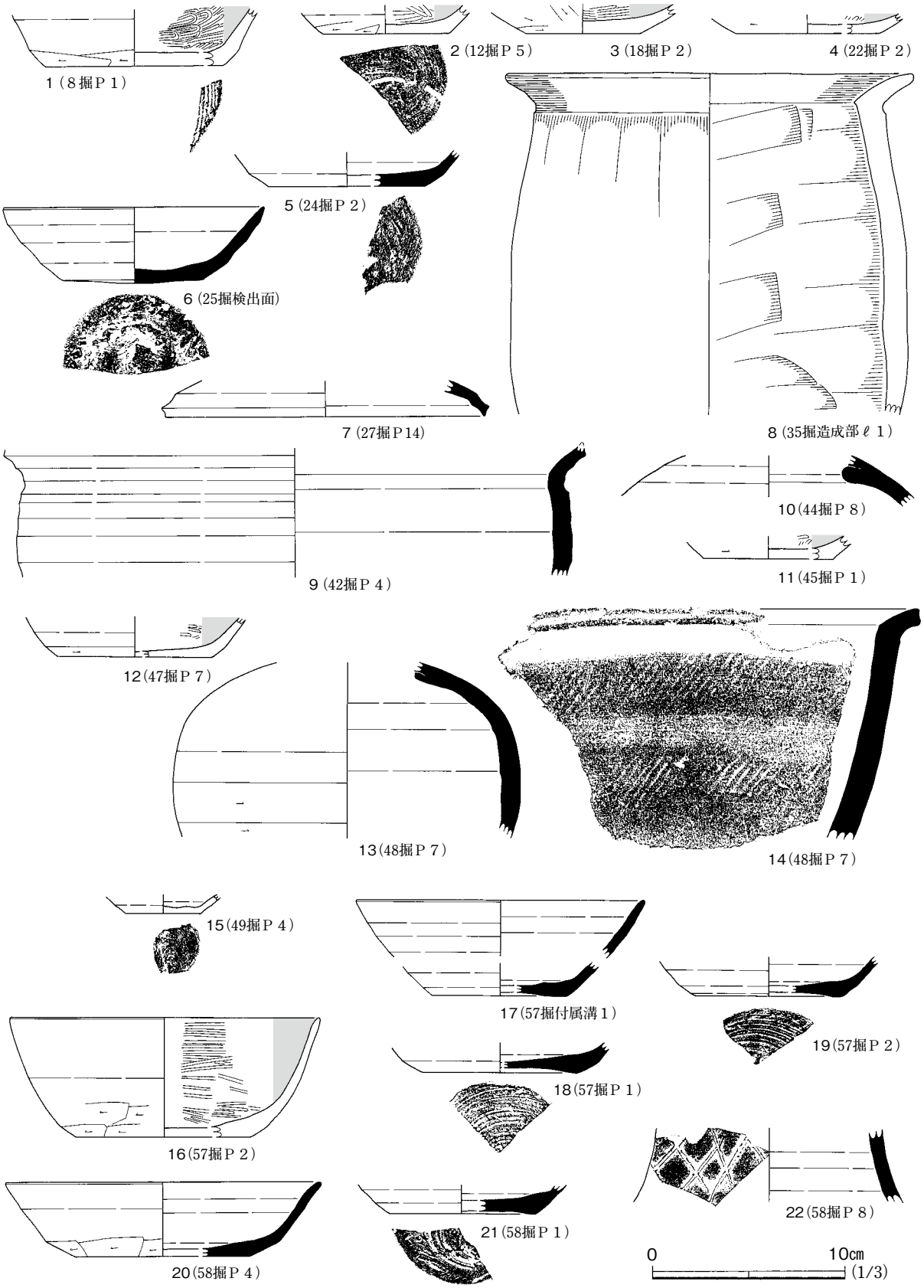
80号掘立柱建物　54・55の土師器坏を図示した。54はＰ９、55はＰ１からの出土である。いずれもロクロを使用しており、内面の調整は不明瞭である。55は底部に回転糸切痕が残り、底部外周は回転ヘラケズリされる。

83号掘立柱建物　56の須恵器坏を図示した。Ｐ４からの出土である。胎土が精製されておらず、白色砂粒を顕著に含む。

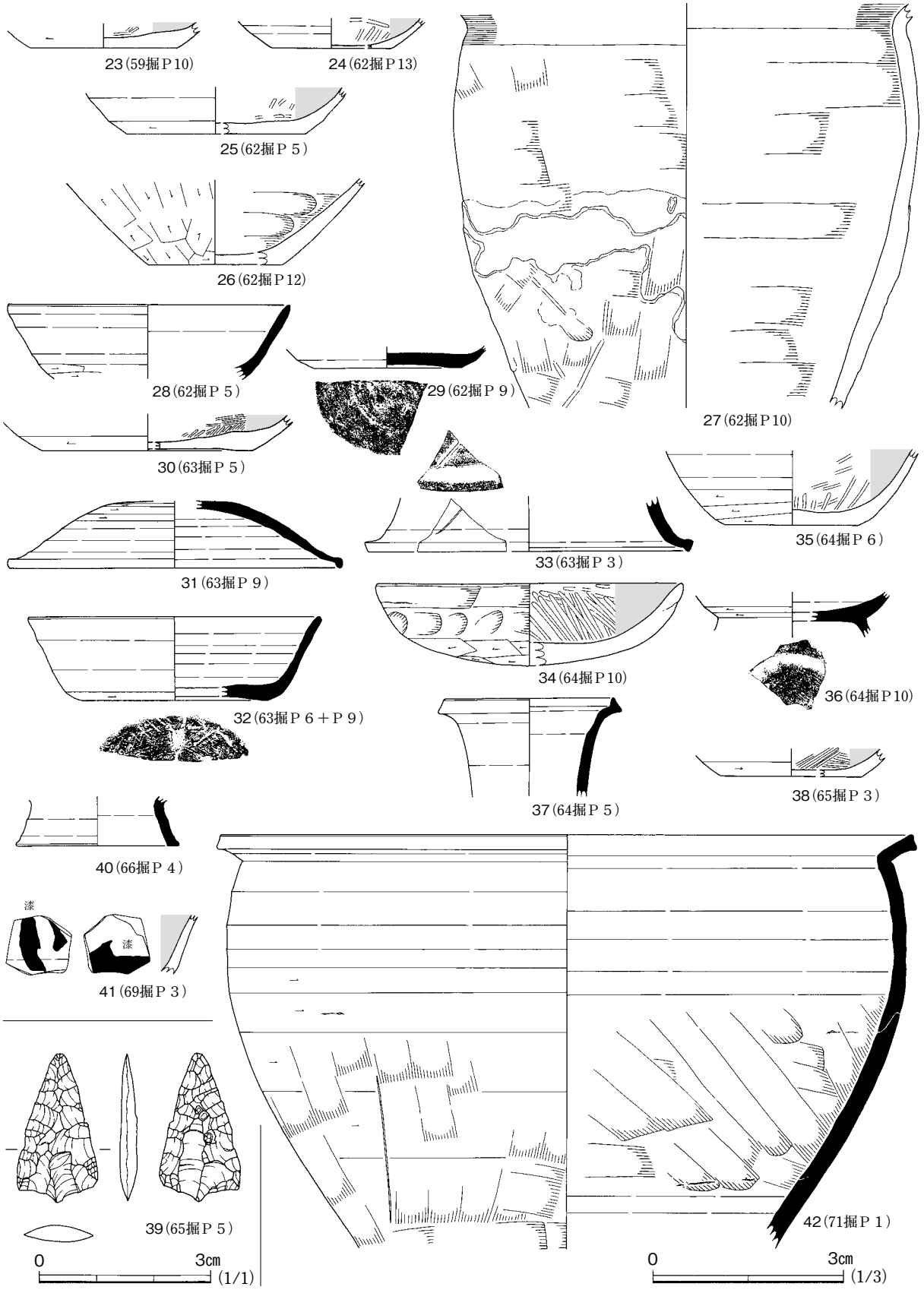
88号掘立柱建物　57の須恵器高台付坏を図示した。同一場所で建て替えられた建物のうち、Ｂとした古い建物のＰ３からの出土である。高台を貼り付けやすくするために、底部の外周に２条の沈線を巡らせている。同様の工夫は60の土師器高台付坏でも確認でき、須恵器と土師器で製作手順が共通する。

89号掘立柱建物　58の土師器坏、59・60の土師器高台付坏、61の須恵器蓋、62の須恵器坏を図示した。58・62は検出面、59はＰ９、60はＰ２、61はＰ１からの出土である。58～60はロクロを使用している。59・60は内外面ともヘラミガキと黒色処理が施され、60は外面の底部外周に２条の沈線を巡らせて高台が固着しやすくしている。同様の工夫は57の須恵器高台付坏でも確認でき、土師器と須恵器で製作手順が共通する。62は底部に回転糸切痕が残る。

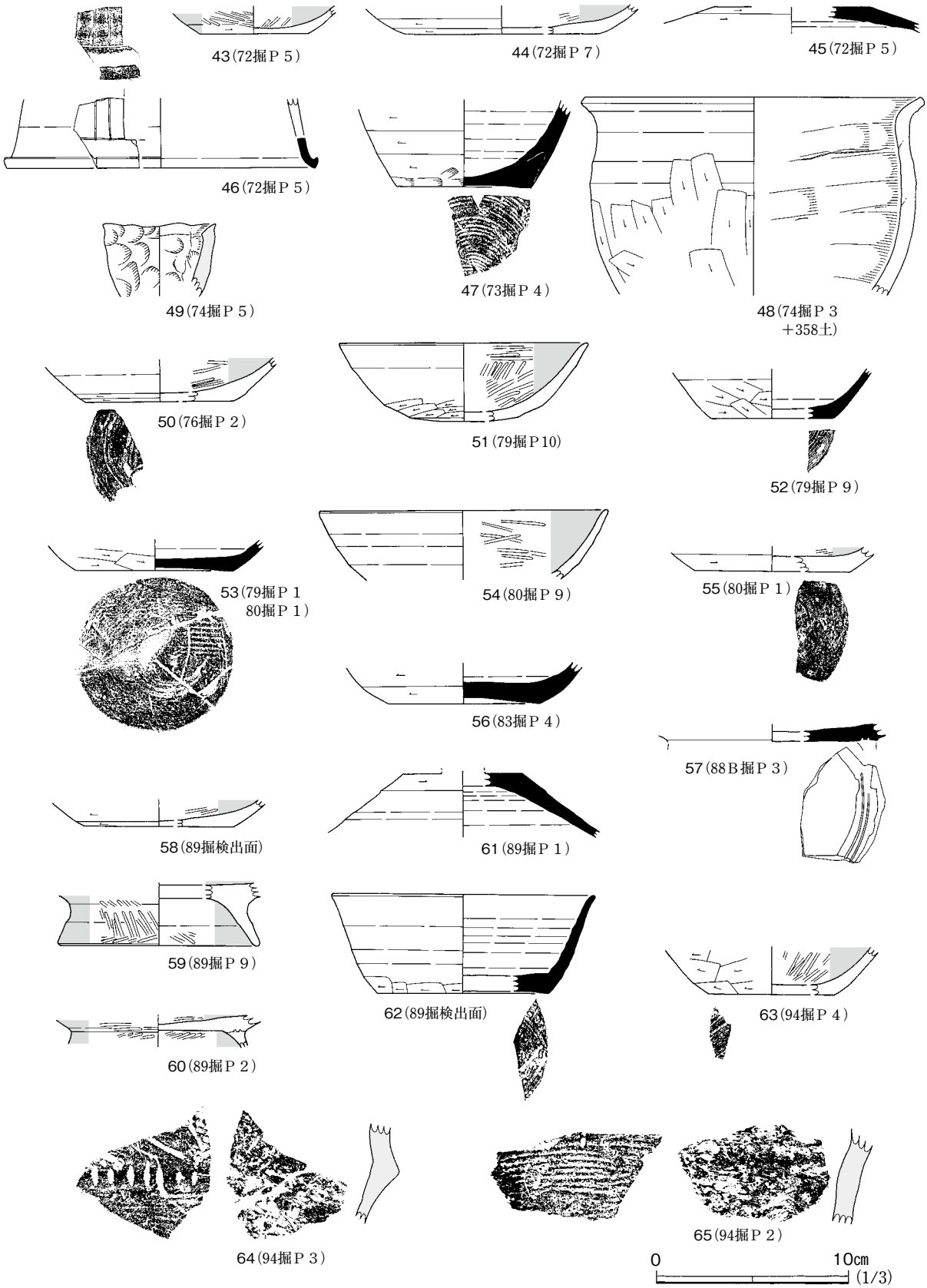
94号掘立柱建物　63の土師器坏、64・65の縄文土器を図示した。63はＰ４、64はＰ３、65はＰ２からの出土である。63はロクロを使用しており、底部に回転糸切痕が残る。内面の調整は不明瞭である。64・65は別の柱穴の出土だが、同一個体であろう。胎土に繊維を含み、色調は表面が淡褐色であるのに対して中は黒色を呈し、断面がサンドイッチ状となる。外面の条痕は明瞭であるが、内面は不明瞭である。64には、沈線で文様が描かれた口縁部文様帯と、文様帯の下部を画する刻みの施された隆線が認められる。



第100図　8～58号掘立柱建物出土遺物



第101図　59～71号掘立柱建物出土遺物



第102図　72～94号掘立柱建物出土遺物

第５章　まとめ

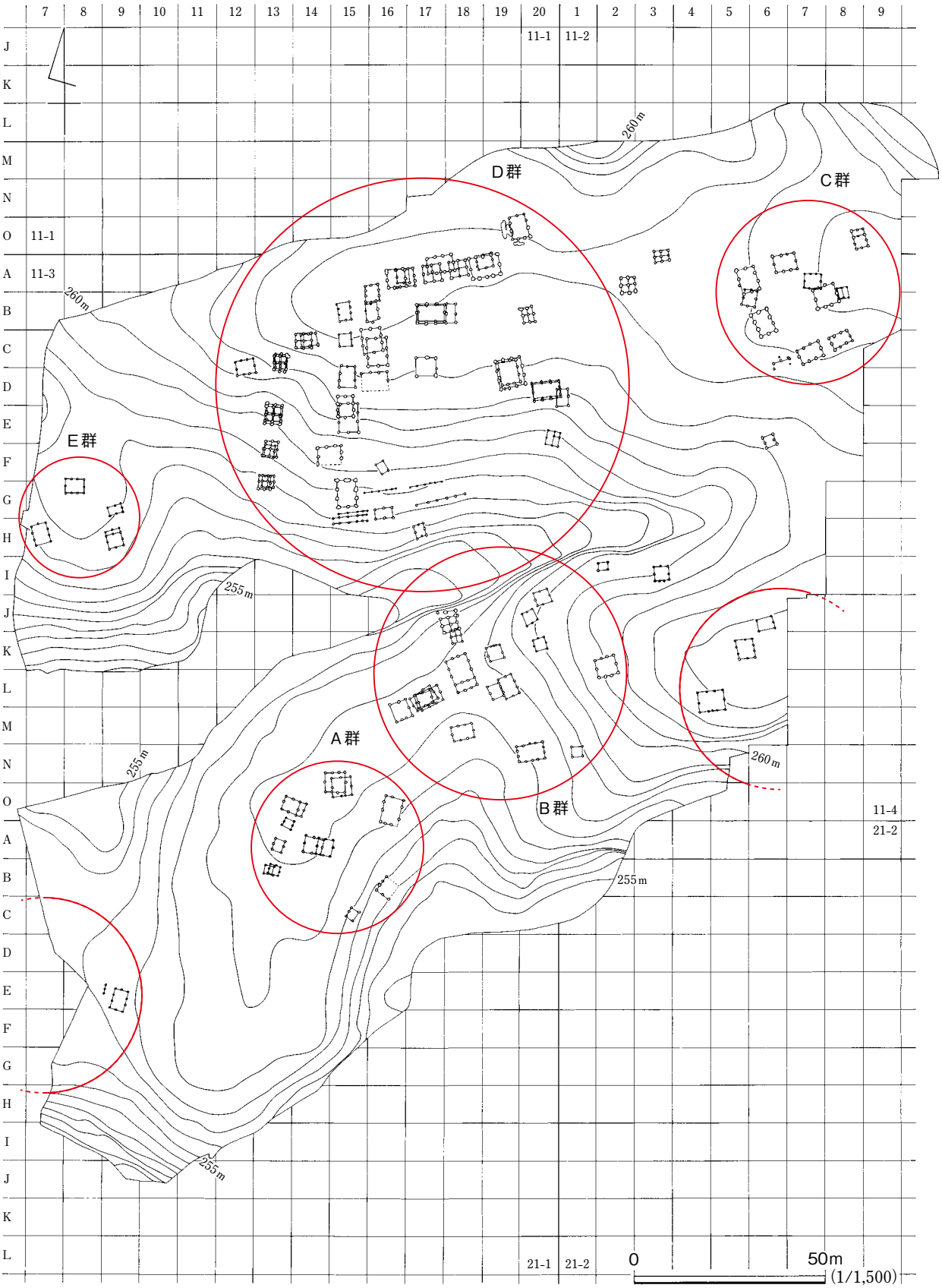
本報告書では、東山田遺跡第２次調査の掘立柱建物と柱列について報告した。調査では、掘立柱建物・柱列以外にも、竪穴建物や土坑といった多くの遺構を確認している。遺跡の評価は、それらの内容を踏まえてなされるべきなので、本章では、掘立柱建物と柱列の調査成果を整理していく過程で気付いた点を列記し、まとめとする。

まず第１点は、掘立柱建物と柱列はいくつかの群にグループ分けできそうなことである。あくまでもそれは、平面的な分布の主観的な認識に過ぎないが、第103図に示したように、７つのグループに分けられそうに見える。これらのうち、第２次調査区のなかで完結するとみられるグループは、Ａ～Ｅ群とした５つである。各グループ内の掘立柱建物の多くは建物軸を揃える傾向にあり、一定の規制があったことをうかがわせる。各グループの占有面積を計測することは難しいが、各遺構群の範囲を、試しに円で把握してみると、その直径はＡ群が45ｍ、Ｂ群が65ｍ、Ｃ群が50ｍ、Ｄ群が100ｍ、Ｅ群が30ｍとなる。同図では掘立柱建物と柱列のみを示し、本来はこれと同時併存したであろう竪穴建物や土坑などを省いている。そのため遺構群としては不完全だが、掘立柱建物と柱列のみを示したことによって、上記のグループの存在をより明確に認識することができた。

第２点は、推定した各グループに、占有面積の広狭や構成要素の違いとった相違点が認められることである。際立つのはＤ群で、他のグループより占有面積が格段に広く、倉庫と考えられる総柱構造の掘立柱建物を多く持ち、南面には塀もしくは柵とみられる柱列が設けられている。このような属性を持つＤ群は、特別な存在と評価できる。第１章で触れたように、その性格には２つの考え方が提示されている。Ｄ群を構成する掘立柱建物には、改修や建替が行なわれた事例が多く、２～３時期の変遷が想定できる。相対的に古いと判断した掘立柱建物には、火災に遭っている事例が少なからず認められる。

第３点は、柱間の数と建物の面積に、ある程度の相関が認められることである。ごく当たり前のことではあるが、柱間数が多くなるほど面積が大きくなる。２間２間で総柱の構造の掘立柱建物は、10～20㎡前後に規模が集中し、一定の規格性を見て取れる。最も確認例が多い２間３間の掘立柱建物では、20～30㎡前後に規模のピークがある。２間４間、３間３間、３間４間と柱間数が多く、規模の大きい掘立柱建物は数が限られるため、特別な存在であったと予想できる。面積が40㎡を超える特に大規模な27・59・62・89号掘立柱建物のうち、27号掘立柱建物以外はＤ群に属す。27号掘立柱建物が属すＢ群も、Ｄ群に次ぐ占有面積を有しており、掘立柱建物の規模とグループの規模とには、相関する関係があると思われる。

最後に第４点として、遺物に関わる特徴をあげる。掘立柱建物から出土し、本報告書に掲載した遺物は65点である。このうち縄文土器・石器・かわらけを除く60点が、上記で触れた遺構群の時期を示すと考えられる。その60点は奈良時代後半から平安時代前期の土師器・須恵器で、平安時代前期のものが大半を占める。特徴的なのは須恵器の比率の高さであり、全体の半数以上の31点である。この31点には、22・33・46の円面硯を含む。３点の円面硯はすべてＤ群に属す掘立柱建物から出土しており、Ｄ群の性格を反映する遺物と評価できる。



第103図　第２次調査区の掘立柱建物と柱列の配置

第１表　掘立柱建物一覧

番号	柱間・構造	庇	平面	規模	面積	変遷	所属群	遺物	備考
8	２間３間		南北	3.5×5.4	18.9			1	１柱列付属
9	２間２間		正	2.55×2.6	6.63	14→９	A		
10	２間３間		正	5.15×5.25	27.0375	11→10	A		
11	２間２間		正	4.9×5.05	24.745	11→10	A		
12	２間２間		南北	3.6×4.45	16.02	13→12	A	2	
13	２間２間		正	4.35×4.45	19.3575	13→12	A		
14	１間１間		正	2.25×2.3	5.175		A		改修
15	１間２間		南北	2.7×3.0	8.1		A		
16	２間３間	東	東西	3.65×5.8	21.17		A		改修
17	１間２間		正	2.6×2.7	7.02		A		
18	１間２間ヵ		南北	2.4×2.7	6.48		A	3	
19	３間４間		南北	4.7×7.0	32.9		A		
20	２間３間ヵ		南北	4.1×4.5	18.45		A		
21	２間４間ヵ		東西	3.9×6.25	24.375	23→22→21	B		
22	２間２間		東西	3.6×4.35	15.66	23→22→21	B	4	
23	２間３間		東西	4.3×6.25	26.875	23→22→21	B		
24	２間２間総柱		東西	3.6×4.05	14.58	26→24	B	5	北に付属施設ヵ
25	２間２間ヵ		正	4.65×4.75	22.0875		B	6	
26	２間２間総柱		南北	2.75×3.55	9.7625		B		
27	３間４間		南北	5.5×8.75	48.125		B	7	南面床張ヵ
28	２間３間		東西	3.65×5.45	19.8925		B		
29	２間２間		東西	3.6×3.85	13.86		B		
30	１間２間		正	3.25×3.3	10.725		B		
31	２間２間		正	2.95×3.05	8.9975		B		
32	２間３間		南北	3.8×5.45	20.71	32？36	B		改修・雨落溝
33	１間２間		正	3.7×3.8	14.06		B		
34	２間２間ヵ		正	3.65×3.7	13.505		Bヵ		
35	３間４間		東西	4.4×6.75	29.7		B	8	改修・雨落溝・造成部
36	１間２間		南北	3.15×3.6	11.34	32？36	B		
37	１間１間		正	2.7×2.7	7.29		B		
38	１間１間		東西	2.05×2.4	4.92		Bヵ		
39	２間３間		東西	4.8×5.35	25.68		B		改修
40	２間３間		東西	5.3×6.6	34.98				
41	１間２間		東西	3.1×4.2	13.02				
42	２間３間		南北	4.4×5.05	22.22			9	
43	２間３間		東西	3.25×5.25	17.0625		C		
44	２間３間		東西	3.95×6.1	24.095		C	10	
45	２間３間		東西	3.7×4.45	16.465	45？47		11	

番号	柱間・構造	庇	平面	規模	面積	変遷	所属群	遺物	備考
46	２間３間	北	南北	3.15×4.75	14.9625		C		
47	２間３間		東西	5.05×5.7	28.785	45・50・51？47	C	12	
48	２間３間		東西	4.3×5.75	24.725		C	13・14	
49	２間３間		南北	4.5×6.55	29.475		C	15	
50	１間１間		南北	1.6×2.85	4.56	51→50？47			
51	１間１間		正	2.8×2.9	8.12	47？51→50			
52	２間３間		南北	4.7×6.35	29.845	52？53	C		
53	２間２間		南北	3.55×4.3	15.265	52？53			
54	１間２間		正	2.9×2.95	8.555		Cカ		床張カ
55	２間２間総柱		正	3.8×3.85	14.63		Dカ		
56	２間２間総柱		東西	2.7×3.7	9.99		Dカ		
57	２間３間カ		南北	4.25×5.7	24.225		D	16～19	改修・付属溝
58	２間２間総柱		南北	3.0×3.9	11.7		D	20～22	改修
59	２間４間		東西	5.45×7.65	41.6925	61→59	D	23	
60	２間２間		南北	3.35×3.85	12.8975				北東隅小区画
61	２間２間		東西	3.6×4.0	14.4	61→59	D		改修
62	３間３間		南北	6.5×7.5	48.75	63→62	D	24～29	
63	３間３間		南北	5.1×6.2	31.62	63→62	D	30～33	
64	２間３間		東西	4.35×6.9	30.015	71・72→64カ	D	34～37	
65	２間２間		南北	3.05×3.55	10.8275	66→65	D	38・39	A案
	２間３間		東西	3.6×4.5	16.2			38～40	B案
66	２間３間	東	東西	4.55×7.0	31.85	66→65	D	40	A案
	２間２間		東西	4.5×4.75	21.375				B案
67	２間３間		南北	5.05×6.1	30.805	68→67カ	D		
68	２間３間		南北	5.15×7.15	36.8225	68→67カ	D		
69	２間３間		南北	3.6×4.2	15.12	70→69	D	41	
70	２間２間		南北	3.25×4.65	15.1125	70→69	D		
71	２間２間総柱		東西	4.25×4.6	19.55	71→64カ	D	42	
72	２間２間総柱		東西	4.3×4.55	19.565	72→64カ	D	43～46	
73	２間３間カ		東西	(4.4)×6.8	(29.92)		D	47	(　)は復元値
74	１間２間カ		東西	4.8×5.2	24.96		D	48・49	
75	１間１間		南北	2.15×2.9	6.235		D		
76	２間３間		南北	5.0×7.2	36.0		D	50	改修
77	２間２間		南北	2.75×3.3	9.075		D		改修
78	１間２間		南北	2.85×4.5	12.825	80→79→78	Dカ		
79	２間３間		東西	4.05×7.05	28.5525	80→79→78	D	51～53	
80	２間３間		東西	4.0×7.05	28.2	80→79→78	D	53～55	
81	２間３間		南北	3.35×4.8	16.08		D		
82	１間１間カ		正	3.2×3.2	10.24		D		
83	２間３間		南北	4.0×5.4	21.6	85→83	D	56	

番号	柱間・構造	庇	平面	規模	面積	変遷	所属群	遺物	備考
84	２間３間		南北	4.05×5.6	22.68		D		
85	２間３間		南北	5.15×7.4	38.11	85→83	D		
86	１間２間		東西	2.85×4.55	12.9675		D		改修ヵ
87	２間２間総柱		南北	3.2×4.0	12.8		D		建替
88	２間２間総柱		南北	3.95×4.5	17.775		D	57	建替
89	２間４間	東	東西	4.95×10.25	50.7375	90→89	D	58～62	
90	２間３間		東西	4.3×7.25	31.175	90→89	D		
91	２間２間総柱		東西	3.85×4.15	15.9775	98→91	D		
92	２間３間		東西	3.8×5.0	19.0		D		
93	２間２間総柱		南北	3.4×4.0	13.6	96→93	D		改修ヵ
94	２間２間総柱		正	3.0×3.1	9.3	94→95	D	63～65	
95	２間２間		南北	3.2×3.75	12.0	94→95	D		改修
96	１間２間		南北	2.9×3.1	8.99	96→93	D		
97	２間３間	北	南北	3.85×4.7	18.095		E		
98	１間２間		東西	3.3×4.15	13.695	98→91	D		
99	３間３間ヵ		東西	4.4×6.2	27.28		D		
100	２間２間ヵ		東西	2.2×3.65	8.03		E		
101	２間３間		東西	3.65×4.75	17.3375		E		
102	２間３間		南北	4.0×5.05	20.2		E		

注 (1) 柱間や規模・面積は庇を含む数値である。
(2) 規模の単位はｍ、面積の単位は㎡である。
(3) 変遷の「？」は新旧関係が不明なことを表す。
(4) 備考の「改修」は部分的な改修､「建替」は全面的な建替を表す。

第２表 掘立柱建物構造別規模分布

	～５㎡	～10㎡	～15㎡	～20㎡	～25㎡	～30㎡	～35㎡	～40㎡	～50㎡	～60㎡
1間1間	38・50	14・37・51・75	82							
1間2間		15・17・18・54・96	30・33・36・41・78・86・98		74					
2間2間		９・31・77・100	29・34・60・61・65A・95	12・13・22・53・70	11・25・66B					
2間2間総柱		26・56・94	24・55・58・87・93	71・72・88・91						
2間3間			46	８・20・28・43・45・65B・69・81・92・97・101	16・32・42・44・48・57・83・84・102	10・23・39・47・49・52・73・79・80	40・64・66A・67・90	68・76・85		
2間4間					21				59	89
3間3間						99	63		62	
3間4間						35	19		27	

注　柱間および面積には庇を含む。

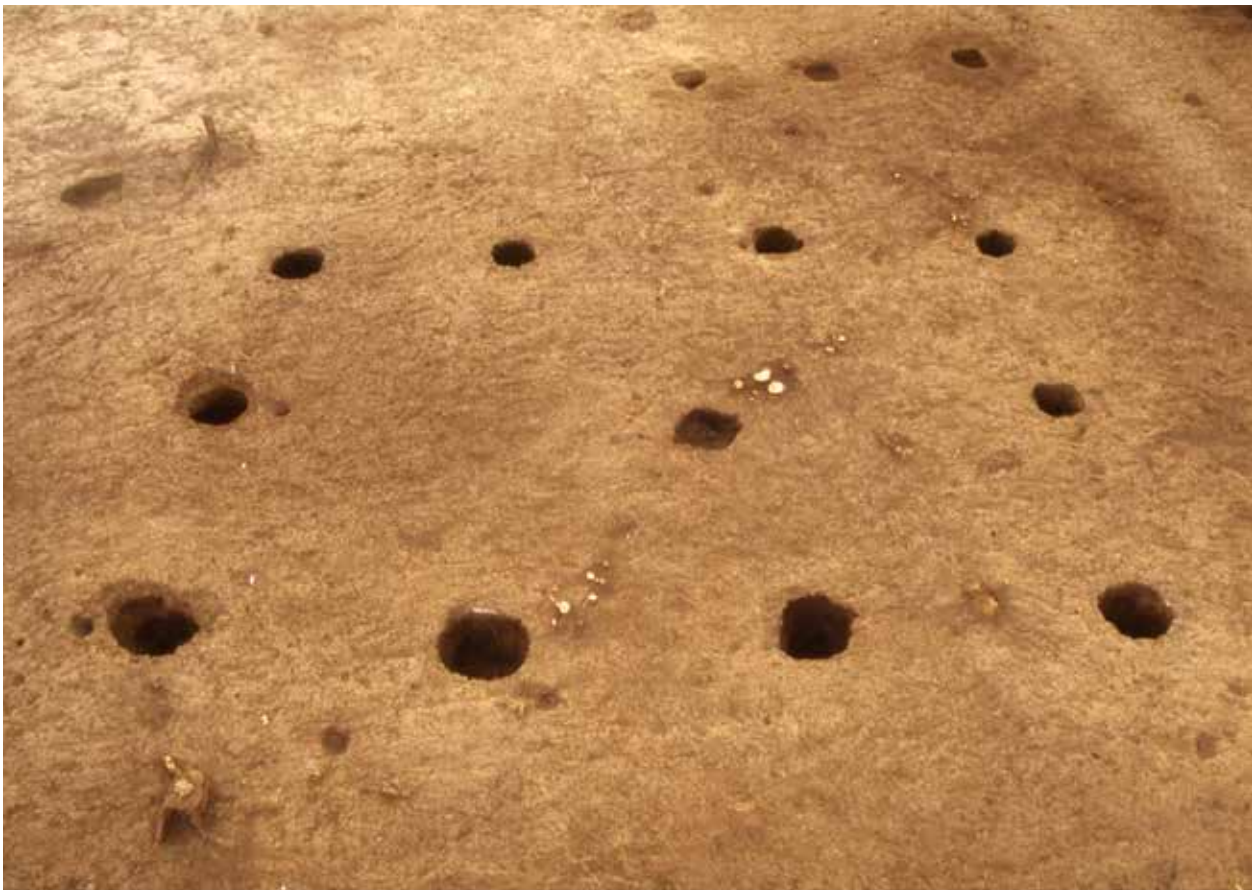
写真図版

東方上空より見た第２次調査区

南方上空より見た第２次調査区

第２次調査区南側丘陵の遺構群

第２次調査区北側丘陵の掘立柱建物群（部分）



８号掘立柱建物

９号掘立柱建物

10号掘立柱建物

11号掘立柱建物

12号掘立柱建物

13号掘立柱建物

14号掘立柱建物

15号掘立柱建物

16号掘立柱建物

17号掘立柱建物

18号掘立柱建物

19号掘立柱建物

20号掘立柱建物

21号掘立柱建物

22号掘立柱建物

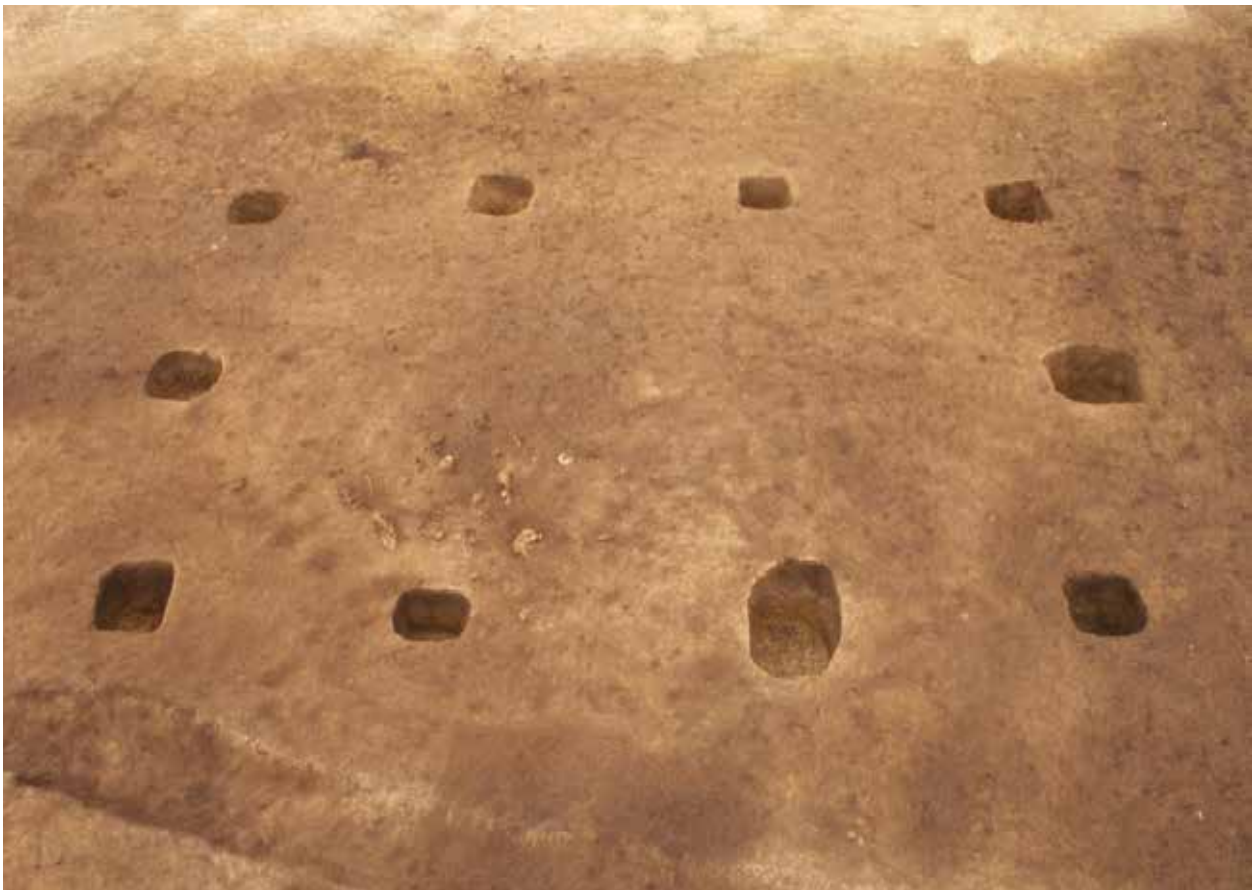
23号掘立柱建物

24号掘立柱建物

25号掘立柱建物

26号掘立柱建物

27号掘立柱建物


28号掘立柱建物

29号掘立柱建物

30号掘立柱建物

31号掘立柱建物

32号掘立柱建物

33号掘立柱建物

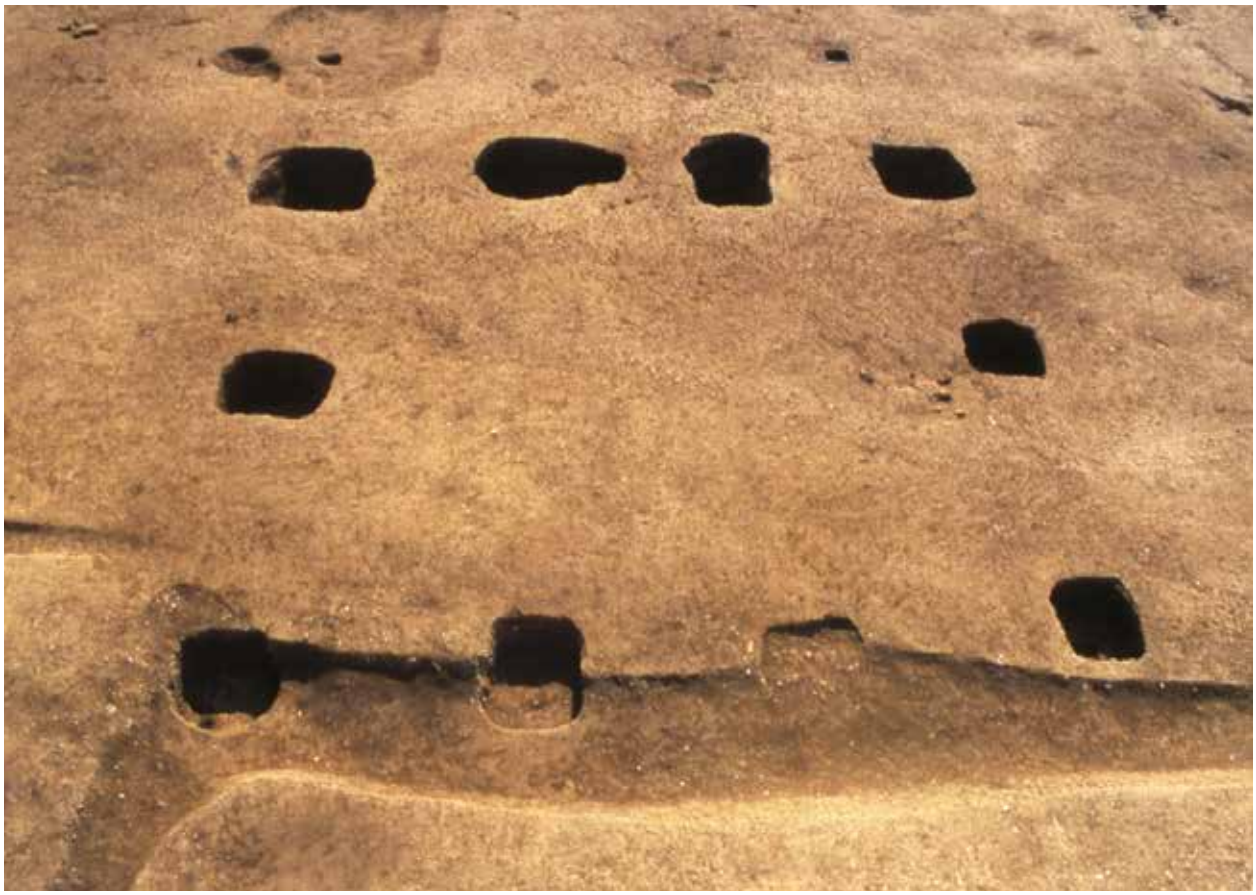
34号掘立柱建物

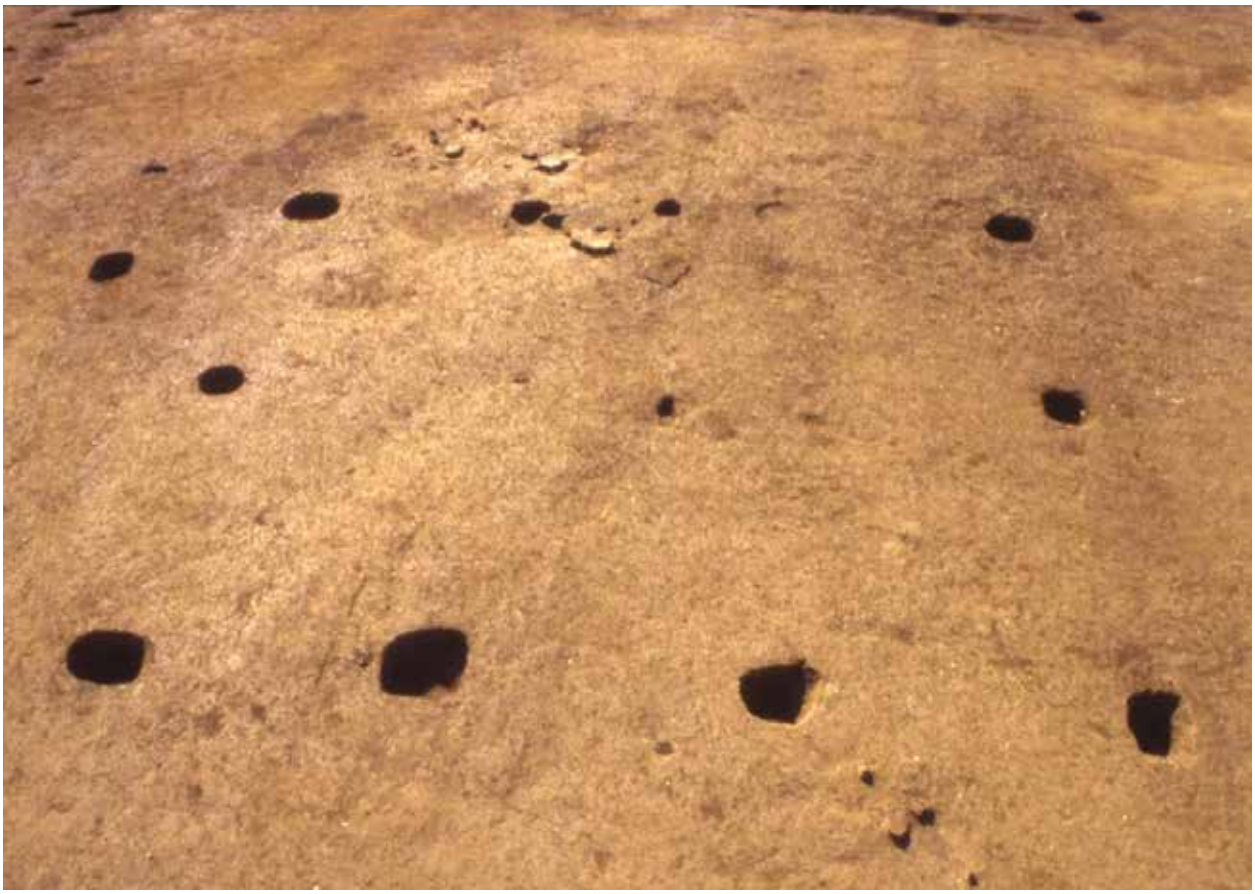
35号掘立柱建物

36号掘立柱建物

37号掘立柱建物

38号掘立柱建物


39号掘立柱建物


40号掘立柱建物

41号掘立柱建物

42号掘立柱建物

43号掘立柱建物

44号掘立柱建物

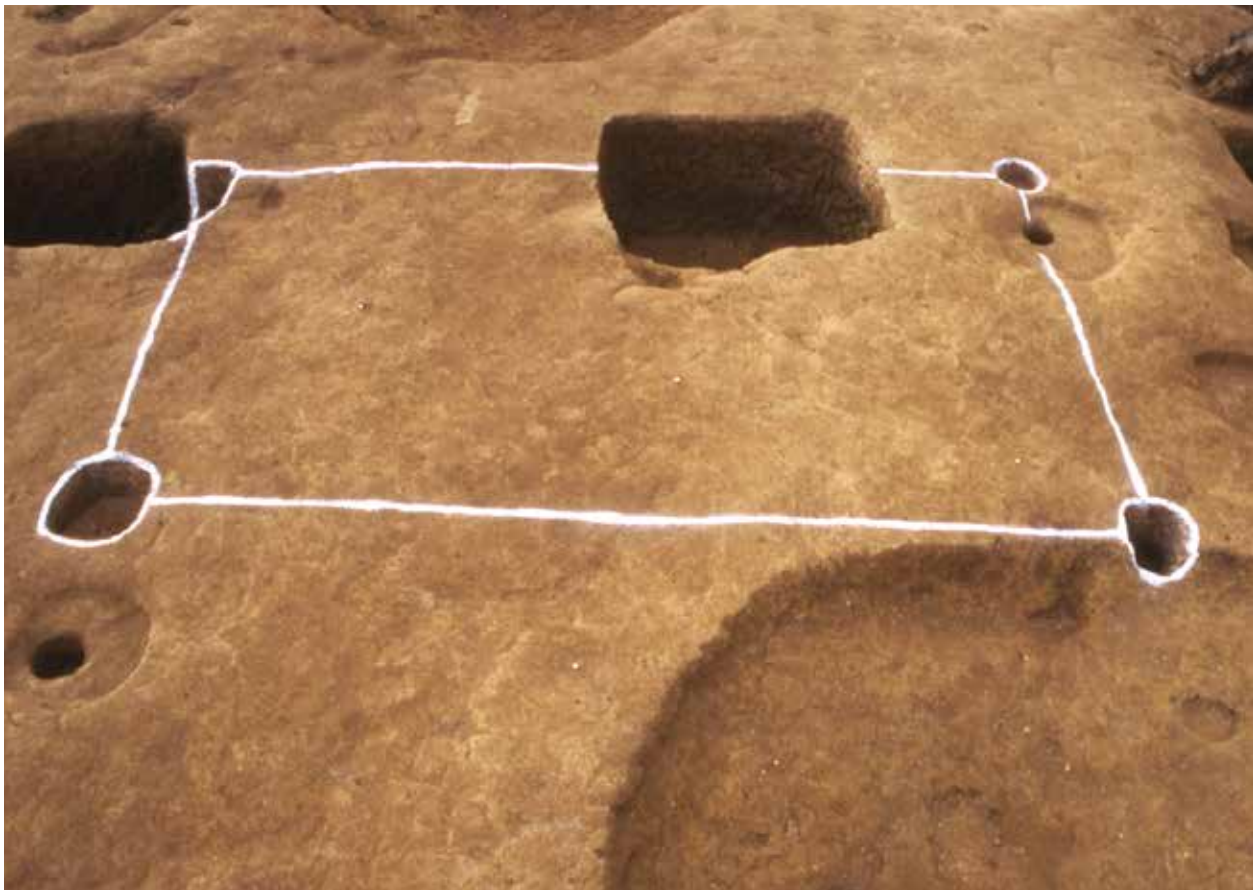
45号掘立柱建物

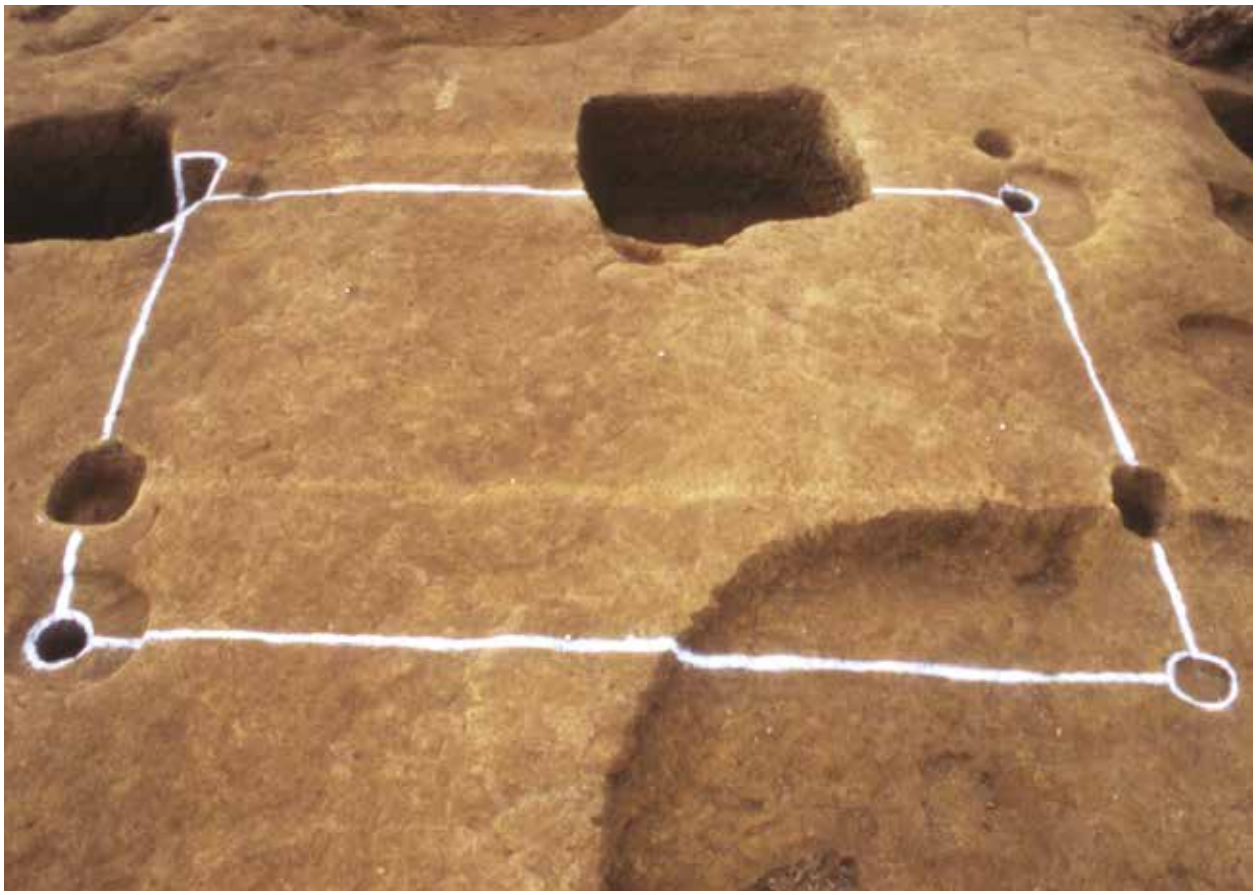
46号掘立柱建物

47号掘立柱建物

48号掘立柱建物

49号掘立柱建物

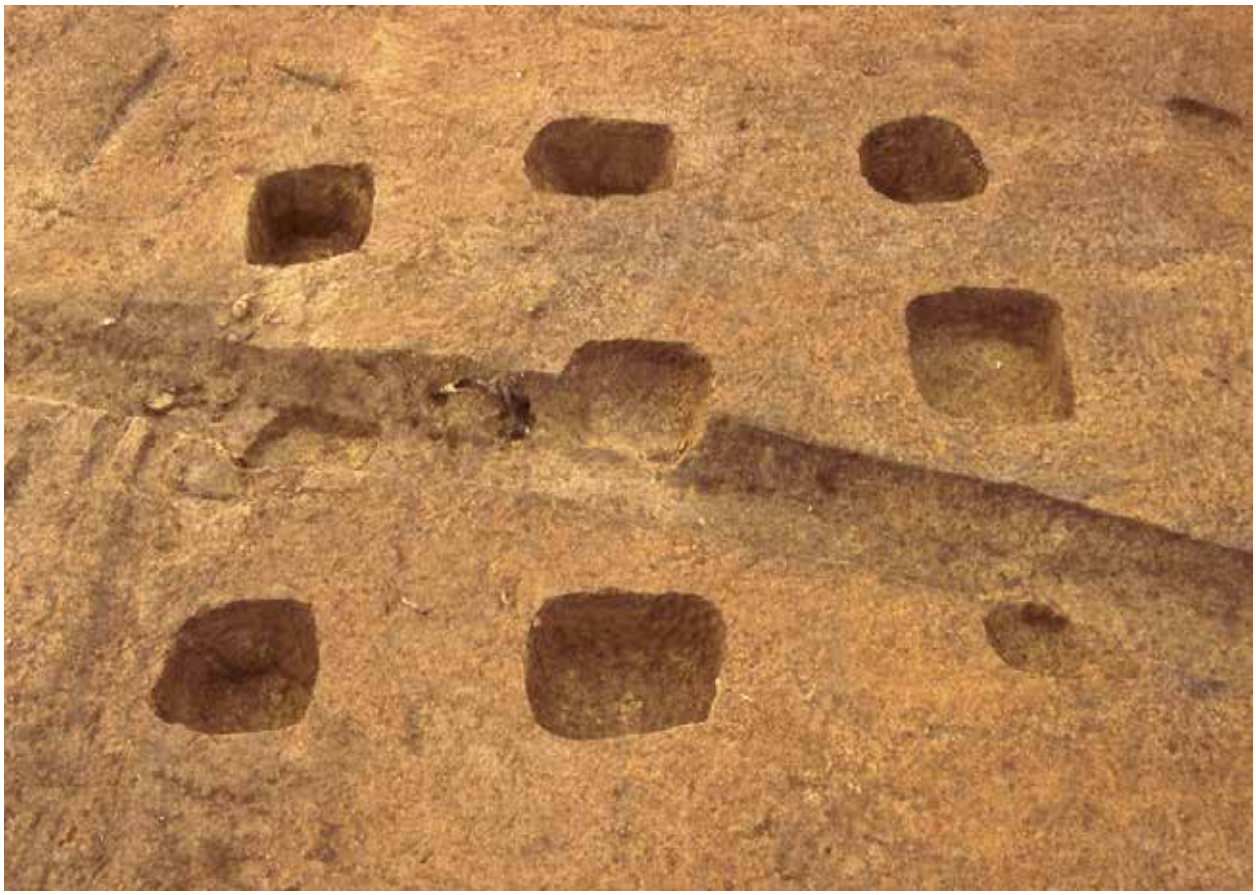

50号掘立柱建物


51号掘立柱建物

52号掘立柱建物

53号掘立柱建物

54号掘立柱建物


55号掘立柱建物

56号掘立柱建物

57号掘立柱建物

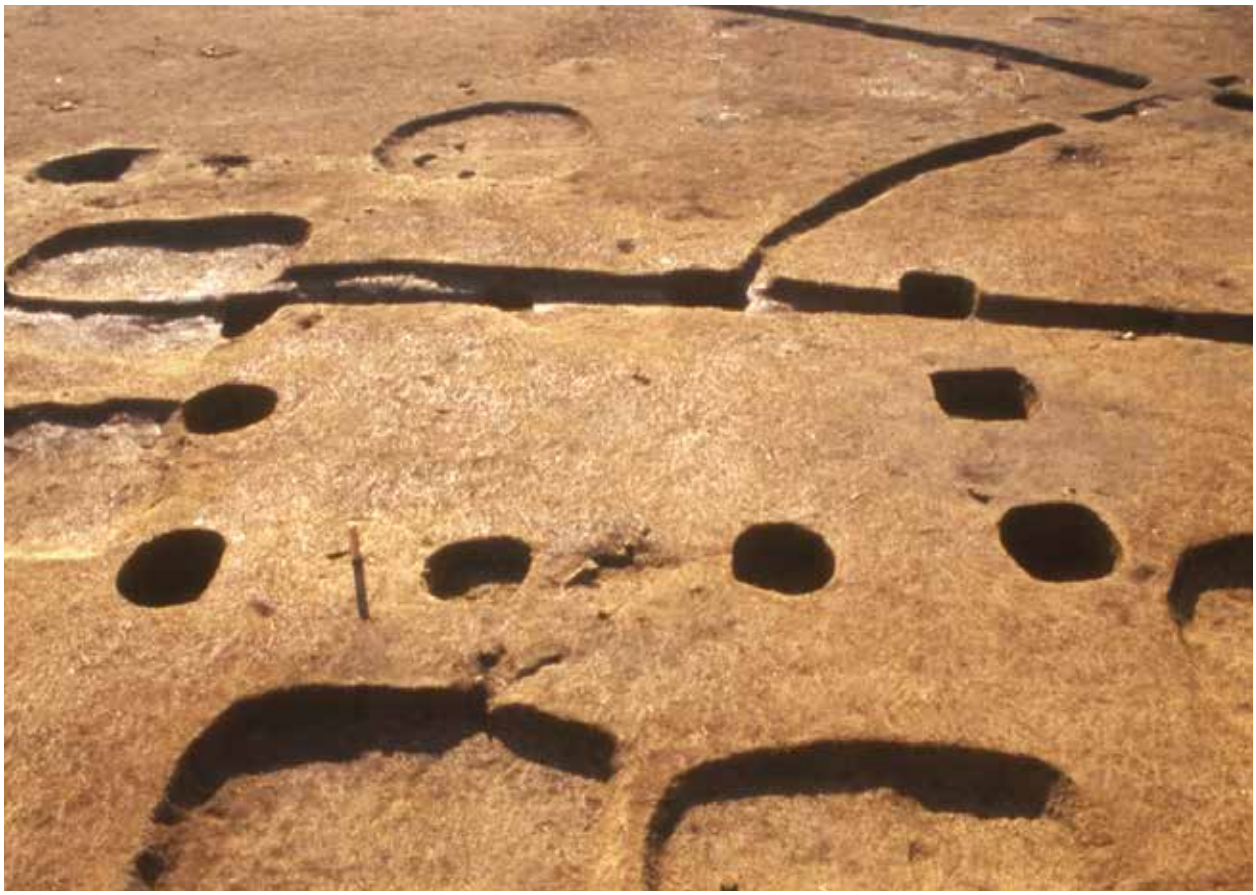
58号掘立柱建物

59号掘立柱建物

60号掘立柱建物

61号掘立柱建物

62・63号掘立柱建物



64号掘立柱建物

65号掘立柱建物

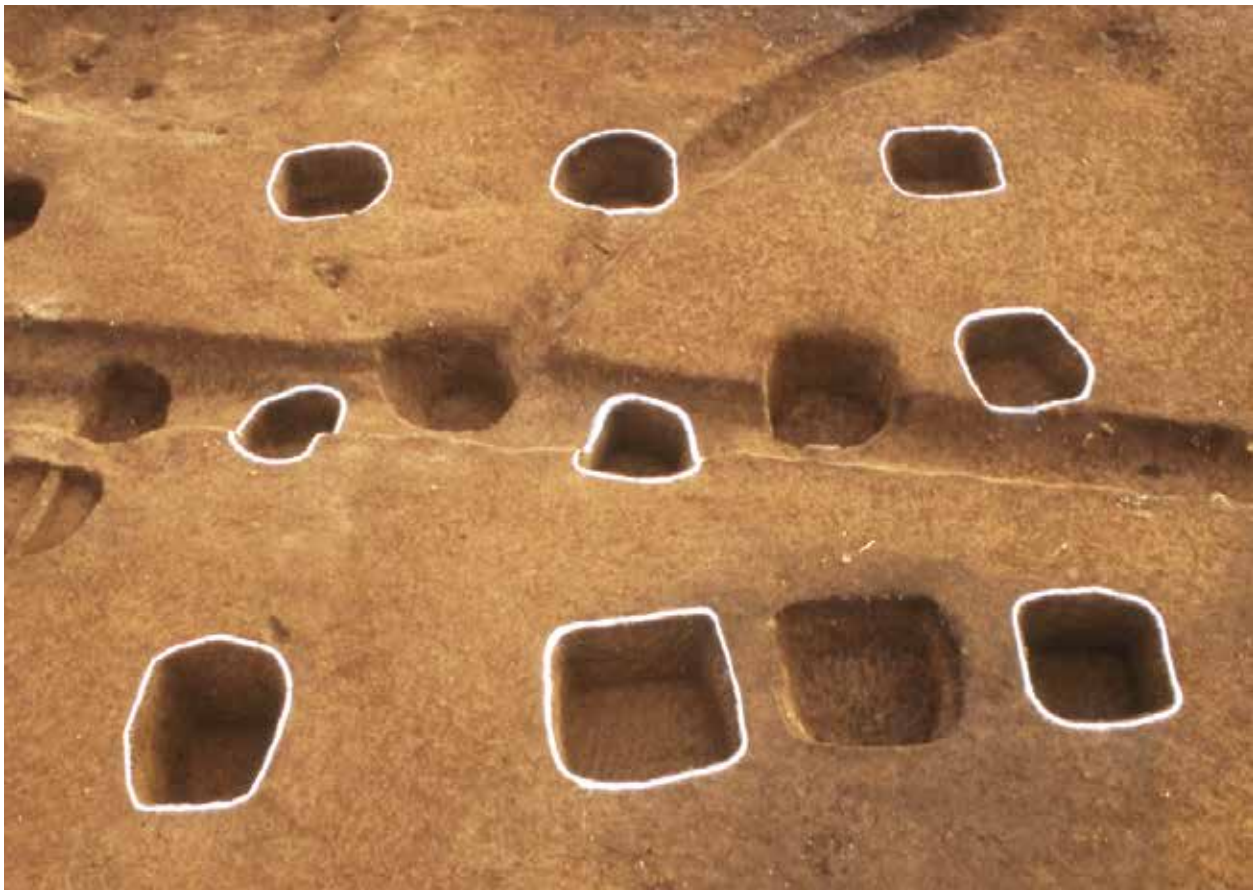
66号掘立柱建物

67・68号掘立柱建物

69号掘立柱建物

70号掘立柱建物

71号掘立柱建物



72号掘立柱建物

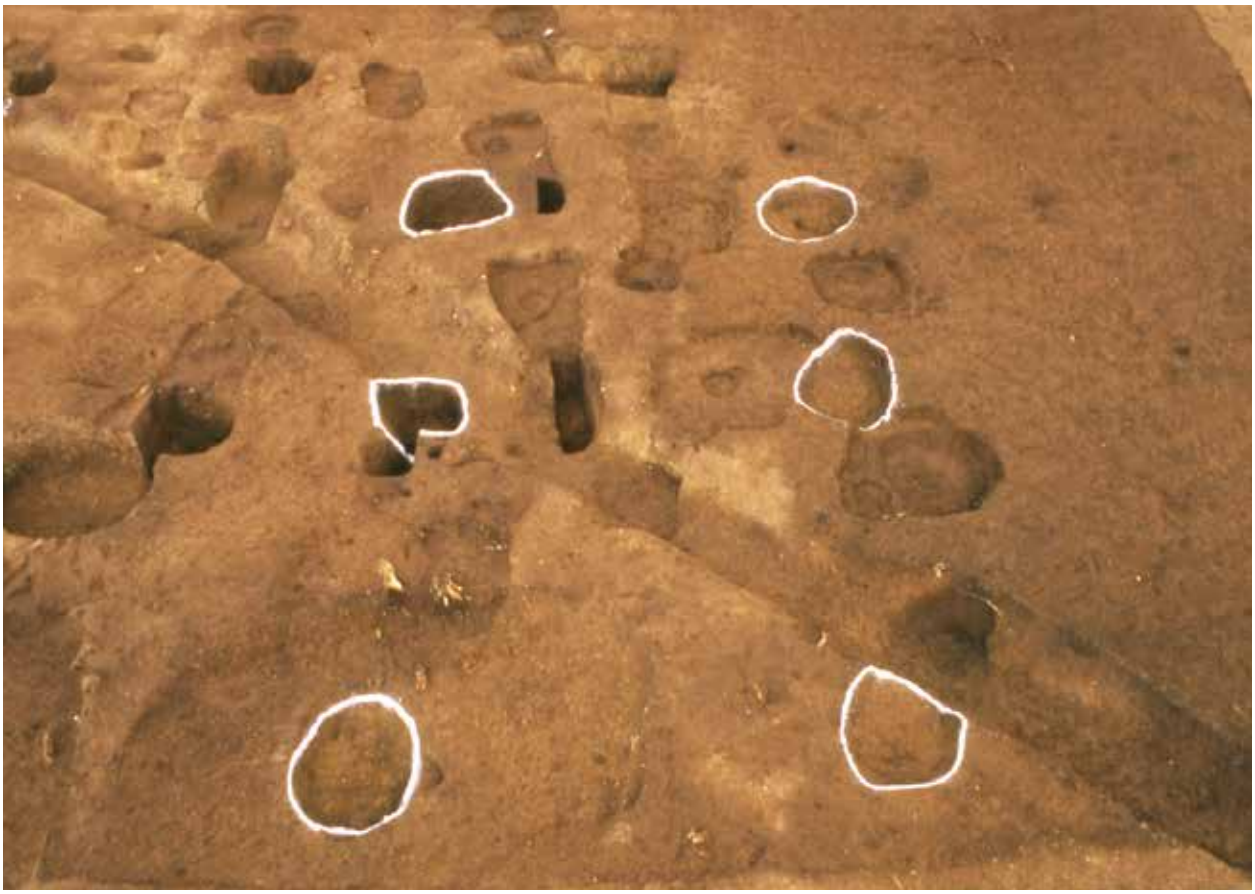
73号掘立柱建物

74号掘立柱建物

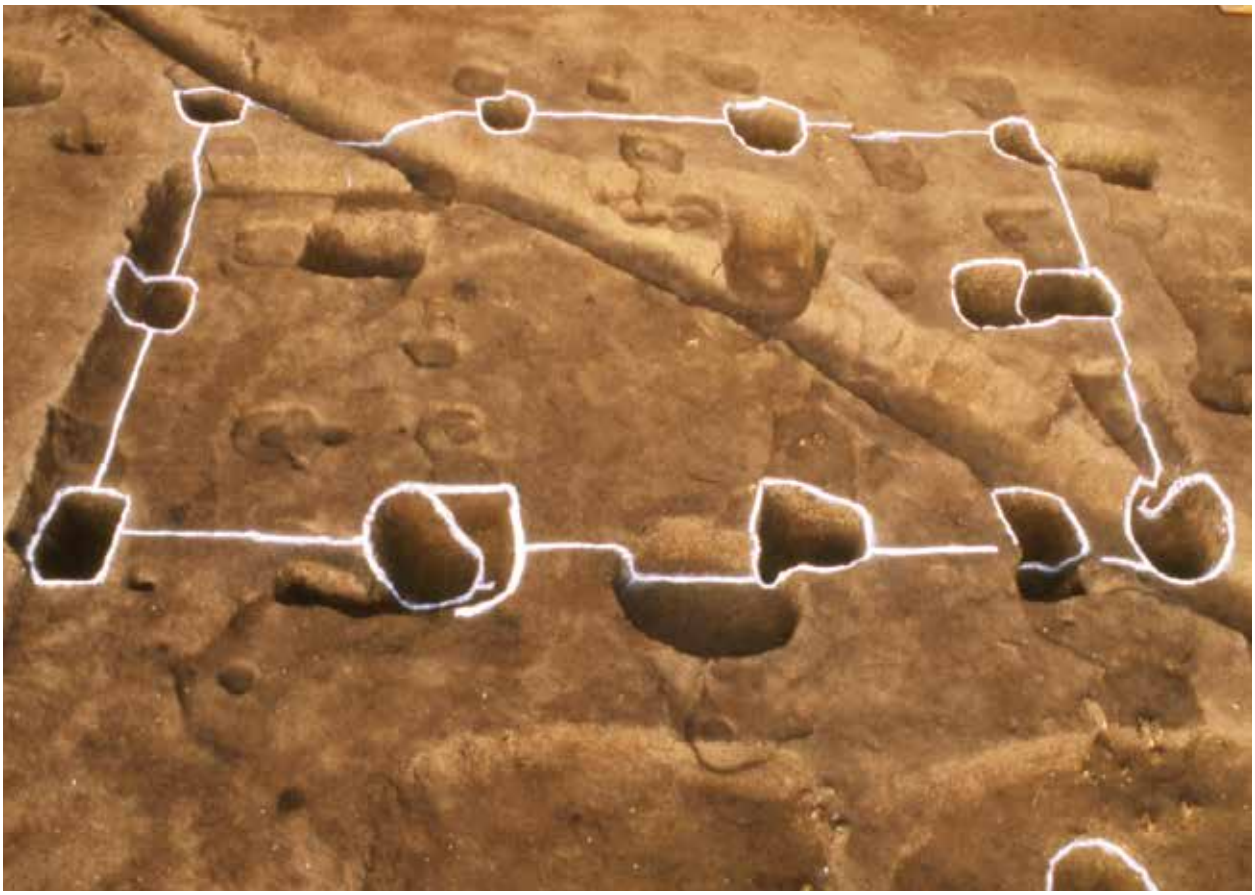
75号掘立柱建物

76号掘立柱建物

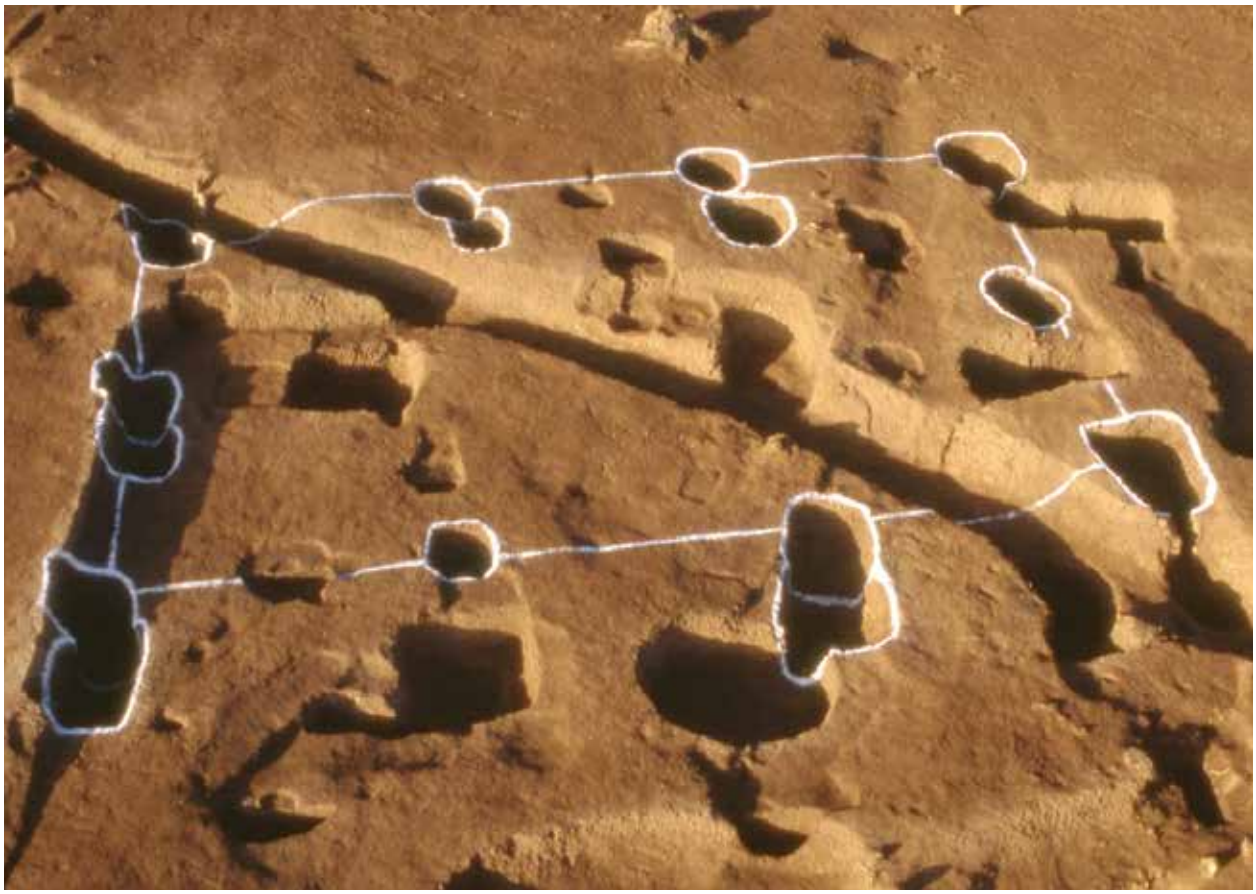
77号掘立柱建物



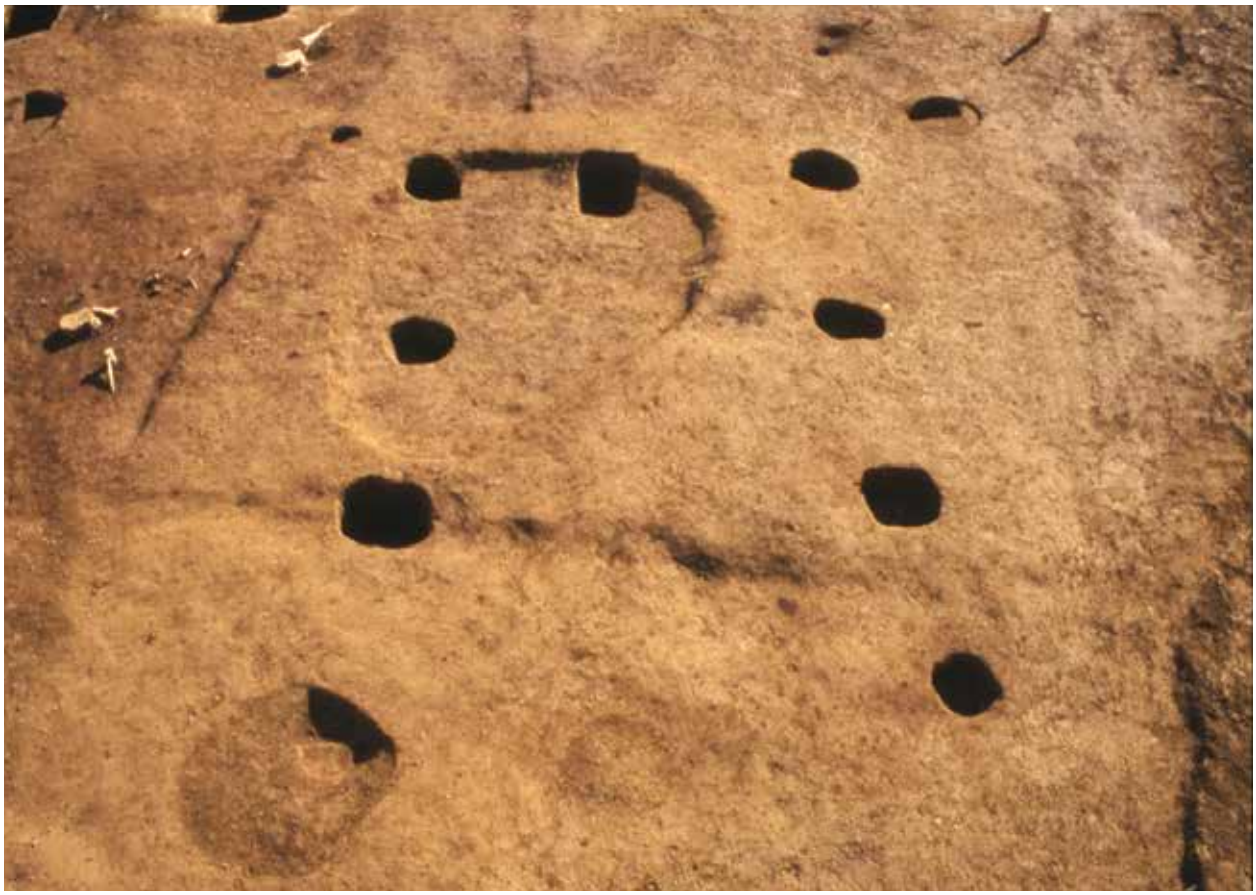
78号掘立柱建物



79号掘立柱建物

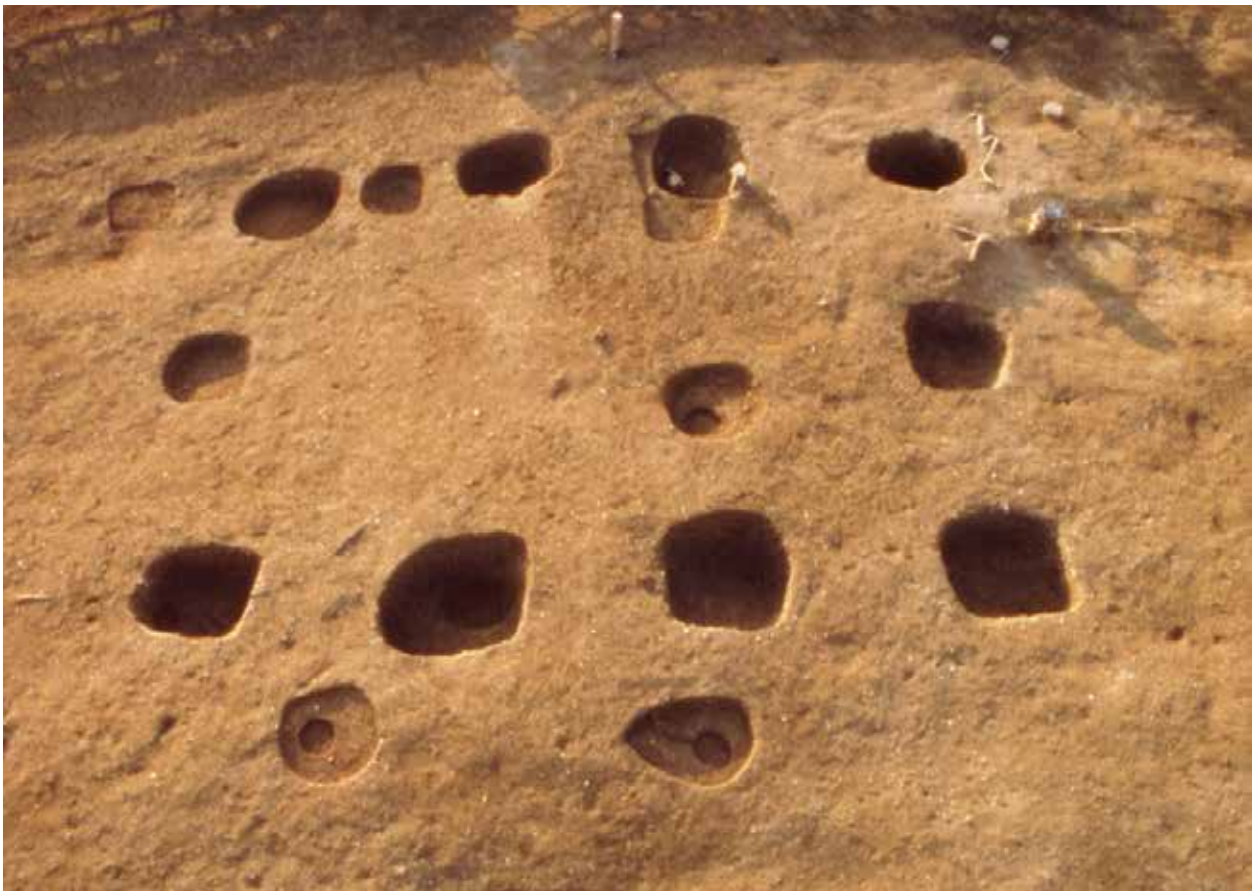


80号掘立柱建物



81号掘立柱建物

82号掘立柱建物


83号掘立柱建物

84号掘立柱建物

85号掘立柱建物

86号掘立柱建物

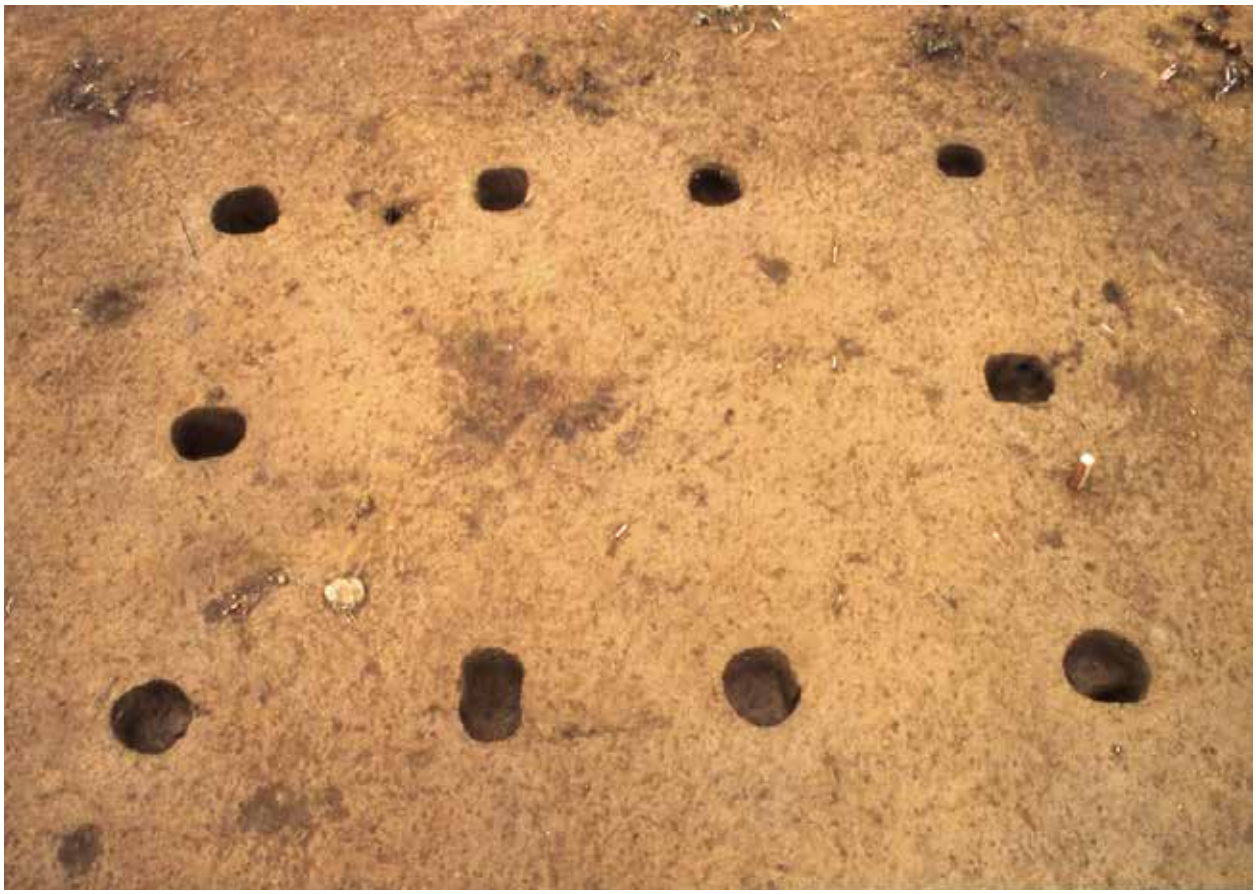
87号掘立柱建物

88号掘立柱建物

89号掘立柱建物

90号掘立柱建物

91号掘立柱建物


92号掘立柱建物

93号掘立柱建物

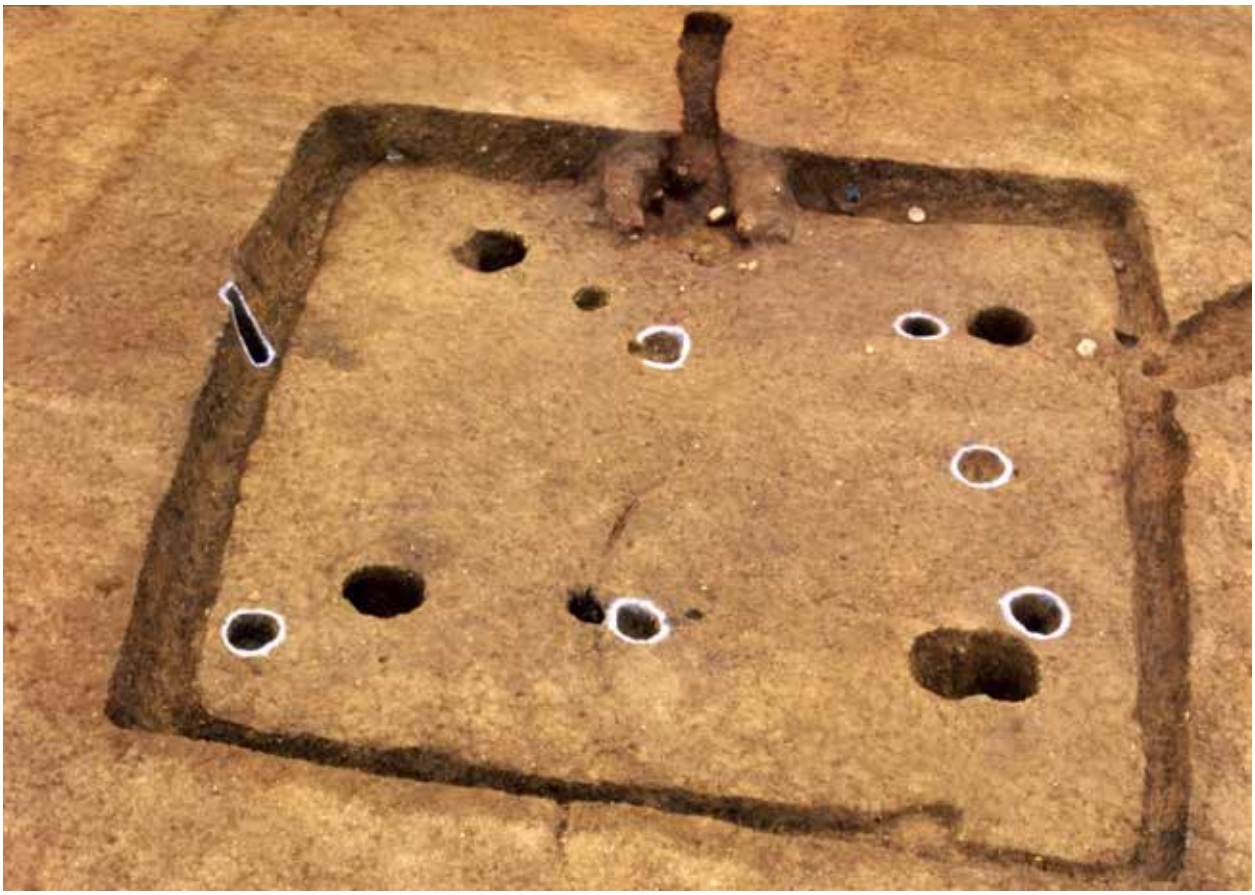
94・95号掘立柱建物

96号掘立柱建物

97号掘立柱建物

98号掘立柱建物

99号掘立柱建物



100号掘立柱建物

101号掘立柱建物

102号掘立柱建物

出土遺物

報 告 書 抄 録

書　　名	考古資料整備活用業務 東山田遺跡 第２次発掘調査報告書 第１冊 掘立柱建物・柱列
編 著 者	垣内和孝
編 集 機 関	公益財団法人郡山市文化・学び振興公社文化財調査研究センター
所 在 地	福島県郡山市喜久田町堀之内字畑田 23 番
発 行 機 関	郡山市教育委員会
所 在 地	福島県郡山市朝日一丁目 23 番７号
発行年月日	令和７年（2025）３月 25 日

所収遺跡名（次数）	所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
東山田遺跡（第２次）（ひがしやまだいせき）	福島県郡山市田村町東山一丁目	2036	1047	37°20′14″	140°25′8″	19940509～19950325	41,800㎡	宅地造成

所収遺跡名	種別	主な時代	収録遺構	収録遺物	特記事項
東山田遺跡（第２次）（ひがしやまだいせき）	集落	奈良・平安時代	掘立柱建物・柱列	土師器・須恵器（円面硯含む）・縄文土器（早期）・石器・かわらけ	

要　　約	東山田遺跡第２次調査のうち、掘立柱建物と柱列を収録。

考古資料整備活用業務

東 山 田 遺 跡

―― 第２次発掘調査報告書 第１冊 掘立柱建物・柱例 ――

令和７年（2025）３月25日

編　集　公益財団法人郡山市文化・学び振興公社
文化財調査研究センター
〒963-0541 福島県郡山市喜久田町堀之内字畑田23番

発　行　郡山市教育委員会
〒963-8601 福島県郡山市朝日一丁目23番７号

印　刷　株式会社　坂本印刷所
〒963-0551 福島県郡山市喜久田町菖蒲池14-26